

木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
今回は、木曽川河口の輪中干拓地・木曽岬町の、
歴史と現状、
そして現在進行形の治水事業をご紹介します。



INDEX

ふるさとの街・探訪記

●明るく住みやすい水郷の街をめざして

面白WATCHING

●風と緑と潮騒と。

木曽岬町の秋をトレッキング

歴史ドキュメント

●伊勢湾台風と高潮堤防

TALK&TALK

●木曽川派川の鋤田川締切り工事の思い出
——三重県木曽岬町長 岡村好友

民話の小箱

●福崎の大地に住む大蛇

明るく住みやすい

水郷の街をめざして

木曽岬町は三重県の西端に位置する堤防に囲まれたデルタ地帯。三六七年前の再開発以降、輪中干拓地として発達してきました。しかし、あいつぐ災害、河川改修による川幅の拡大により、孤島であったその地勢はおびただしい変貌を続け、昭和38年には、名四国道が開通し現在の新しい町が生まれました。以後、木曽岬町は都市近郊の農業地域として発展を遂げ、水と緑が美しいアメニティタウンをめざして、フレッシュな活動を展開しています。

災害に悩まされた 苦闘の開拓史

木曽岬町は木曽川河口の三角州を魚鱗状に開拓し造成した、海拔ゼロmの輪中地帯です。その起源は不明ですが、源平時代には、長島町七島の東に唐戸（現在の木曽岬の加路戸辺り）の島名が見られ、洪水でできた州を開拓して次々と新田を造成。その後、織物の産地として繁栄し、天正9年（1581）には加路戸新田と改称されました。

ところが天正13年（1585）の大地震で加路戸一帯は一瞬泥土と化し、八百戸余りの民家は全部倒壊。陸地としての価値を失ってしまいました。

現在の加路戸は寛永二年（1625）に再開発されたもので、以後積極的な干拓事業によって加路戸輪中は拡大し、見入輪中、源緑輪中なども順次開発されました。が、せっかく開拓された土地も水害で放置されるなど、干拓の歴史はそのまま水との苦闘の歲月だったといえるでしょう。

一方、江戸時代の宝暦治水、明治改修、伊勢湾台風災害復旧で、木曽川の川幅が逐次広げられ、広大な土地が川となって潰れました。それに併せて、見入川、白鷺川、鍋田川が締め切られて代地となり、木曽岬は現在のような姿となりました。

平成元年には村制制定一〇〇年にて「木曽岬町」が誕生。21世紀に向けて、誰もが住みよい街をめざしています。



見入の老松



ふるさとの街・探訪記

おいしさが光る特産ブランド

木曽川からの土砂の堆積と干拓によって作り上げられた木曽岬町は、驚くほど肥沃で、温暖な気候にも恵まれ、農業を主体に発展を遂げてきました。

農地も整備され、水稲や路地野菜・ハウス野菜、トマト・メロンなどの施設園芸、緑のうるおいをあたえてくれる観葉植物の生産が進められています。中でもトマトやメロンは鮮度と味覚の素晴らしさで大人気。特産ブランドとして名古屋や桑名などへ出荷されています。

漁業では、シジミの水産物や海苔、鰻、金魚の養殖が盛んに行われ、地域の活性化に貢献しています。

河川改修と地形の変遷

薩摩藩によるお手伝普請で行なわれた宝暦治水（1755）完成の2年後から木曽川の拡幅工事が行なわれ、それと同時に加路戸輪中と見入輪中の間を流れていた見入川が締め切られ、二つの輪中は陸続きとなりました。締切によってできた土地は、木曽川拡幅工事によって潰れた土地の代替とされ、今でも代地と称しています。

また明治20年から行なわれた明治改修でも、木曽川は拡幅され、約70haの土地が潰れましたが、今度は、加路戸輪中と源緑輪中の間を流れる白鷺川が締め切られて陸続きとなりました。

さらに昭和34年の伊勢湾台風災害の復旧工事で、弥富町との境界鍋田川の締め切りと木曽川の拡幅が必要となり、約17haの土地が潰れましたが、弥富町と陸続きとなり木曽岬も島でなくなりました。

これからの治水

『全町挙げて取り組む水質浄化活動』

昭和40年以降、木曽岬町の人口増加は進み、各家庭からの排水が、川や農業排水路を汚濁することとなり、生活環境は著しく悪化してしまいました。

そこで町は、町全域の下水道事業に着手。昭和63年には市街化区域の公共下水道事業に着手し、平成10年の完成をめざしています。また市街化調整区域では、昭和61年から農業集落排水施設の整備に着手し、町内4ヶ所にクリーンセンターと命名した、し尿処理雑排水の処理場を創設。メルヘンチックでカラフルなイラストを描いた処理場は、木曽川及び伊勢湾の水質浄化に貢献。県が実施する流域別下水道の区域を除き、町村単位で全域の下水道を整備している例は全国でも珍しく、木曽岬町の生活環境への積極的な姿勢が伺われます。

また、木曽岬町老人クラブでは木曽川筋の堤防を清掃。今年7月には建設省が主催する河川愛護月間行事の木曽三川合同河川清掃にも参加。木曽岬町中学校では鍋田川筋の堤防を清掃するなど、地域挙げて環境美化運動に取り組んでいます。



木曽岬町特産品



木曽川支流白鷺川締切の地

西部地区クリーンセンター





ウインドサーフィン

風と緑と潮騒と。 木曽岬町の秋をトレッキング。

川面に映える夕暮れのオレンジ。静かな流れに浮かぶ紅葉。時がゆっくりたゆたう木曽岬町は、水辺のパラダイス。絵はがきの中を散歩するように、気ままに歩けば、季節のないしよ話が聞こえてきそうです。

レジャーゾーン

1 リバーサイドスポーツ

ウインドサーフィン、カヌーにジェットスキー、休日ともなると木曽川筋に集まった若者たちがカラフルに川面を彩ります。風に髪をなびかせながら、川面を駆ける気分は最高です。

2 川辺の風景、渡り鳥がやって来る

木曽川筋は、水鳥の宝庫。秋には、コガモやシギといった渡り鳥の姿も見え始めます。そんな鳥たちの姿を眺めながら一日を過ごすのも、素敵な時間の使い方です。

3 木曽岬温泉

木曽岬温泉は、豊富な湯量と良質の天然温泉。リュウマチ、神経痛、皮膚炎など効能も抜群。名物の砂利風呂も大人気。家族連れでにぎわっています。



木曽川で遊ぶ水鳥の親子

2 町立文化資料館

平成2年に開館した町立文化資料館は、白壁に三角帽子のユニークな外観。館内には、伊勢湾台風災害と復旧工事の資料、昔の農作業道具など、木曽岬の歴史・民俗がいっぱいです。

3 木曽岬神社

昭和34年に襲来した伊勢湾台風により、全村壊滅。この大災害を記録し、遭難者の霊を慰めるために木曽岬神社が創建されました。尚、堤防決壊箇所の最後の締切の地（源緑輪中の白鷺）には伊勢湾台風締切記念碑が建てられています。



木曽岬神社



木曽岬町立文化資料館内風景



源盛院の芭蕉碑



木曽岬温泉・大浴場



ジェットスキー



木曽川河口つり風景



木曽岬町のフェスティバル

町民体育祭

—10月の最終日曜日—

真っ青な秋晴れの空の下、小学校の校庭から、子供たちの歓声や応援の声が聞こえてきます。町民体育祭は



町を上げての大イベント。綱引き、玉入れ、徒競争etc…。一つひとつの競技を通してご近所同士のコミュニケーションも深まります。

こどもみこし

—10月10日(体育の日)—

古くから盛大に祭りが行われていたこの町も、伊勢湾台風で、尊い生命や資産だけではなく、神輿や山車など貴重な文化までも喪失してしまっただけのため、昭和34年以降は形式的なものになっていました。しかし、子供たちに文化の伝承とお祭りの楽しさを知ってもらいたいという願いのもと、昭和58年に子供みこしが復興。10月10日には、ハッピー姿の子供たちが町を元気に練り歩く姿が見られます。



産業文化祭・福祉健康フェスタ

—3月20日(春分の日)—

毎年恒例となった「産業文化祭・福祉健康フェスタ」。会場には、木曽岬町を代表する農・水産物が一堂に集められ、華やかににぎわいを見せます。ゲームコーナーや出店など子供から大人まで楽しめるイベントもいっぱい。町民が一体となって春の一日を盛り上げます。



コラム「だからNO.1」

KISSO をご愛読の皆様へ。編集部から耳寄りなお知らせです。KISSO では、あなたのナンバーワンをお待ちしております。絵画、作文、俳句、工作など、川にまつわる作品ならなんでも結構です。どんどん応募下さい。応募作品は厳正なる審査の上選考し、当選作品は KISSO 誌面に発表。と同時に、木曽川文庫にも展示させていただきます。皆様の作品を、お待ちしております。

● 応募先 ●

船頭平閘門管理所

木曽川文庫“KISSO編集部”

〒496愛知県海部郡立田村福原

☎(0567)24-6233

木曾川派川の 鍋田川締切り工事の思い出

三重県木曾岬町長 岡村好友



伊勢湾台風災害



私ども木曾岬町は三重・愛知の県境に位置し、木曾川河口に造成された土地であります。したがって、古来より洪水との闘いであったと村史に記述されており、とりわけ昭和34年の伊勢湾台風により、当時木曾岬村でありました当町の被害は、周囲の木曾川および鍋田川堤防が九箇所、二、七六五mにわたって決壊、一瞬のうちに全村水没し全世帯が罹災いたしました。ちなみに、この台風による死者は当時の人口の約一〇%の三三八人、家屋の流失・全壊は五八五戸中二六六戸の多さに達すると共に、五十三日の長期にわたり水没

し、まさに潰滅の状態でした。たまたま国におかれては、この災害復旧工事を推進される段階で、兼ねてから計画されながら関係住民の反対で実現できなかった木曾川派川の鍋田川改修計画を伊勢湾高潮対策事業の一環として建設省直轄工事で実施することになり、木曾川分派点の締切り工事は木曾川下流工事事務所が、鍋田川左右岸堤防復旧と河口締切り堤防工事は当時新設された愛知工事事務所により応急復旧工事を含め昭和34年10月から施工、鍋田川改修関連事業が昭和38年3月、三重・愛知県境問題に関連して両県が委託した下流部土地造成事業が昭和46年3月に竣工し今日の形体となりました。

回顧いたしますれば、この締切り工事に伴い古来から孤島であった私どもの町が隣町の愛知県弥富町と地続きとなり、また、三本の堤防が木曾川本堤の一本となり国全体から見れば大きなメリットのある工事ではありましたが、木曾川引堤により私ども木曾岬には引堤幅一七〇m、潰地一六七千㎡、移転戸数四七戸に及ぶ関係住民の犠牲がありました。しかしながら、水防対策から見れば非常に大きな効果のある工事であったと思います。今後国・県におかれは、地域住民が安心して潤いのある生活が送れますよう先見の明をもって諸事業を推進されんことを切望します。

木曾岬町長 岡村 好友

大正14年6月11日生
昭和37年4月 総務民生課長
昭和39年6月 木曾岬村助役
昭和42年5月 木曾岬村長
平成元年5月町制施行により木曾岬町長となり現在に至る。

伊勢湾台風と高潮堤防

災害に悩まされた干拓の島を再び襲った伊勢湾台風。愛知県と三重県の両県で死者・行方不明者4,533名という災害史上、類い稀な大災害でした。この災害を契機に我が国の高潮対策は大きく前進。以来、高潮による災害は驚くほど減少しました

大きく変わった 高潮対策工法

昭和初期の海岸堤防は、天端も低く、主に石積、石張の構造で、室戸台風、枕崎台風などの超大型台風による災害のつど、天端を高くしたり、パラペットを作ったりし



白鷺地区の締切に全力をあげるサンドポンプ

て改良修復工事がなされていました。ところが、昭和28年の台風13号による高潮災害で、三重県沿岸と愛知県三河湾、静岡県に大きな被害が発生。この災害を契機に昭和31年に「海岸法」が、同33年12月には近代海岸工学の礎ともいえるべき「海岸保全施設築造基準」が制定され、堤防全体をコンクリートで覆う「三面張」が用いられるようになりました。

その直後の昭和34年9月26日、潮岬に上陸した台風15号（伊勢湾台風）は伊勢湾の西部を通過。伊勢湾岸域にとつて最悪の南東の風になり、低い気圧による水面上昇と風の吹き寄せによる水面上昇が重なり、伊勢湾の奥では最高潮位がT・P・+3・89mという記録的なものとなりました。特に伊勢湾奥は昭和28年の台風13号による災害を逸れたために、高潮に対する堤防の改良が進んでおらず、壊滅的な被害を受けました。

伊勢湾台風による被災直後、「伊勢湾等高潮対策事業」が特別措置法として制定され、「海岸保全施設築造基準」も見直されました。

この伊勢湾沿岸部を襲った二つの台風による高潮災害によって、これまでの実績最高潮位を対象とした計画から、「伊勢湾台風モデル」と呼ばれる、予測される最悪の潮位と波のうちあげを考慮した計画に変わり、さらに「三面張」による構造の確立、河口部における河川堤防の高潮対策など、我が国の高潮対策法工法に大きな変換をもたらし、著しい効果を上げてきました。

BOOKS

「木曾三川流域誌」が 発刊されました。

木曾三川での近代的な治水事業（明治改修）の着手以来百周年を記念して発刊された記念図書。発電、上水道・農業用水等の水利事業及び流域の歴史・文化・産業等について木曾三川流域を対象に多分野にわたり、専門的にとりまとめたものです。水系の源流から河口までを貫き、流域を各分野を通してまとめた文献はこれまでになく、治水及び利水の今後を考察する上で、意義ある一冊といえます。

本誌は四部で構成されており、約千ページの大著。木曾川文庫はもちろん、流域内の各市町村と全国の都道府県の図書館、大学図書館で閲覧することができます。



時代の流れとともに 消えた渡し船

その昔、四面を河と海に囲まれた木曾岬町は、渡船が唯一の交通機関。東海道の熱田から桑名までの七里の渡しは、加路戸と源緑の間を流れる白鷺川を通行していました。明治20年代の三川分流域では、三川を自由に往来することができ、渡船場も十箇所を越え、米、魚などすべての生産物、生活必需品は舟運に依存していました。

しかし昭和9年2月には加路戸―弥富町中山間に木曾岬橋ができ、また国道一号線が開通されると、徐々に陸路に変わり、昭和38年、鍋田川締切工事が実施されると渡船場は廃止され、のどかな渡し舟の風景はすっかり姿を消しました。



福崎の大池に住む大蛇

三重県木曽岬町

昔、昔、木曽岬町の福崎には大池がありました。

今でこそ、黄金色の稲穂が波打つ肥沃な田園地帯も、

その昔は、深く不気味な池だったとか。

そもそもこの池は、堤防が決壊してできたもので、

村の古老でさえ、その深さを知らないという約三〇〇〇㎡ほどの大

きな池。三〇余りの大蛇が住んでいると伝えられていました。

ある日のことです。村の農民で竹内甚九郎という人が、池のほと

りの田んぼで草取りをしていました。

あまりの暑さに木陰に横たわっていた枯れ木に腰をかけ、一服たば

こをくわえて休んでいたところ、突然、雷鳴がとどろき、突風が吹

き荒れました。

恐れおののいた甚九郎は、枯れ木にしがみつき神仏に助けを求めた

そうです。

ところが、その枯れ木も大きな地ひびきとともに動きだし、すさ

まじい音を立て、水けむりをあげて大池に沈んでいきました。

これは長年、この池に住む大蛇の仕業だったとか。

甚九郎は恐怖のあまり気を失い、その場に倒れてしまいました。

夕方、家人に助けられ、十日ほど高熱でうなされたそうです。

それからこの池は「魔の池」として村人に恐れられ、ここに集ま

る魚には、誰も網を入れることがなかったそうです。

時代は移り明治末期には、巡査が博徒を追ってこの池に飛び込み、

翌日には死体となって発見されたこともありましたが、

「魔の池」の伝説は、誰もが知ることとなり、昭和31年、木曽川

の土砂を吹き込んで干拓されるまで、人々はこの池に決して近寄る

ことがなかったそうです。

●木曽川文庫利用案内●



《開館時間》 午前9時～午後4時30分

《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》 無料

《交通機関》

国道1号線尾張大橋から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・

木曽川文庫

〒496 愛知県海部郡立田村福原

TEL(0567)24-6233

＝編＝集＝後＝記＝

KISSOもNO.4を発刊することとなりました。そこで流域内の各市町村、小中学校図書館などに、趣のあるファイルを進呈し、末永く愛読していただくとともに、実のある内容を心掛けております。

NO.4編集にあたっては木曽岬町長はじめ、職員の方々に大変お世話になり、ありがとうございました。

次号は多度町です。ご期待ください。

(表紙写真 全面：鍋田川河口域
左：鍋田川河口船だより
右上：木曽川で遊ぶ水鳥
右下：木曽川河口域しじみ採り風景)